

【速報】
成田市台下方平II遺跡住居跡
(奈良時代初め)出土の金銅製帯金具



(縦2.3cm、横3.4cm、重さ4.8g)

今調査中の台下方平II遺跡で、奈良時代初め(約1300年前)の住居から金銅製帯金具が単独で出土しました(写真)。

帯金具は皮のベルトを飾る複数の金具類で、奈良時代の役人は、ひと目で位の上下が分かるように帯金具の材質が区別されていました。写真のように銅に金メッキした帯金具を着用できたのは長官である国守などです。このことから本遺跡の人々は、身分の高い人物と何らかの関係があったと考えられます。写真の帯金具の表面には、弧状の連続した文様が毛彫りと呼ばれる細い線で刻まれています。

周辺で同じような帯金具が出土した遺跡としては、JR成田駅西側の中台遺跡や円護台遺跡があります。

【ご案内】 **お知らせ!**



企画展「印旛の弥生文化
2000年前の記憶を紐とく」開催中

当センター考古資料展示室にて、平成15年1月14日(火)より、6月30日(月)まで企画展を開催しています。

生活・墓制・土器の3点に主眼を置いて印旛沼周辺の弥生文化をとらえた展示です。佐倉市六崎大崎台遺跡を初め、印旛沼周辺の著名な遺跡を網羅しており、左下写真にも載せたような土器棺など、見応え充分な展示です。是非ご来場下さい。土日祝日閉館。入場無料。

【発掘中の遺跡】
2～3月予定 **がんばってます!**

<成田市>
 台下方平II遺跡 (弥生～奈良・平安時代)

<佐倉市>
 大蛇中芝遺跡 (弥生時代～奈良・平安時代)
 白井屋敷遺跡 (弥生時代、奈良・平安時代)
 井野長割遺跡 (縄文時代)

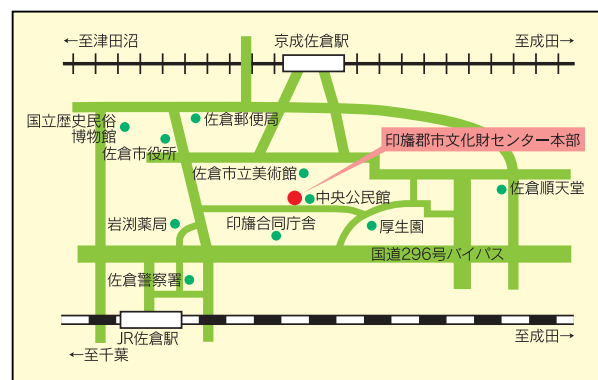
【室内作業】 **こつちもやっています!**

<本部>
 佐倉市鑄木町198-3 TEL 043-484-0126
 南三里塚宮原第1遺跡 (成田市、旧石器時代)
 流谷野馬土手 (富里市、縄文時代～近代)
 神門房下遺跡C地点 (佐倉市、縄文時代～中近世)
 宮内井戸作遺跡 (佐倉市、縄文時代)
 六崎外出遺跡 (佐倉市、縄文時代～古墳時代)
 南作遺跡 (四街道市、縄文時代、奈良・平安時代)
 権現堂遺跡 (四街道市、弥生時代～中世)
 浮矢遺跡特 (四街道市、奈良・平安時代)
 瀧水寺裏遺跡 (本埜村、旧石器時代、縄文時代)
 向台宮前遺跡 (栄町、古墳時代～奈良・平安時代)

<成田事務所>
 成田市飯仲字台畑330-1 TEL 0476-26-7208
 成田市内遺跡整理 (成田市)

【おしらせ】

※上記の発掘現場、室内作業は見学できますが、都合によりご期待に添えない場合もありますので、必ず、事前にご連絡ください。詳細は本部へお問い合わせを!



発行・編集 財団法人 印旛郡市文化財センター 〒285-0025 千葉県佐倉市鑄木町198-3 TEL 043(484)0126 http://www.inba.or.jp 平成15年2月15日 043(485)9871 http://www.inba.or.jp



みやうちいどさく
佐倉市宮内井戸作遺跡
(VI地区)



ミミズク土偶 (縦13.5cm)



土偶出土状況



宮内井戸作遺跡 (VI地区) 全景

宮内井戸作遺跡は佐倉市の最南部、鹿島川とその支流の弥富川によって形成された、標高40mほどの台地上に立地します。これまで14年間にわたる発掘調査の結果、縄文時代後・晩期(約4,000～2,300年前)の大集落のほぼ全体が明らかになってきました。

今回の調査区は集落の南西部にあたり、調査の結果、写真のように無数の竪穴住居の柱穴が発見されました。もちろん一時期にすべての柱穴が存在したわけではなく、縄文人が長期間にわたって何度も住居を立て替えた結果を表しているのです。また、膨大な量の遺物も出土し、その総重量はおよそ6.5tに達しました。

それらの柱穴の一つから、素晴らしい遺物が見つかりました。「ミミズク土偶」です。縄文時代後期後半の柱穴の下半から、無造作に投げ捨てられたかのように、倒立した状態で発見されました。折れた左足も同じ柱穴内から見つかっています。小ぶりですが丁寧に作られていて、髪を複雑に結び上げ、両耳に大きな丸いピアスをしています。よく見ると、顔を中心に全身が赤く塗られています。

ミミズク土偶は、その顔がミミズクに似ているところから名づけられ、この時期に関東地方を中心に作られるようになります。土偶は何らかのお祭りに利用された呪術的性格をもつ遺物で、そのほとんどが壊された状態で見つかります。一般的に土偶はバラバラに壊される例が多いですが、今回のような完全に復元できる形で見つかるのはきわめて珍しいです。

成田市南三里塚宮原第1遺跡

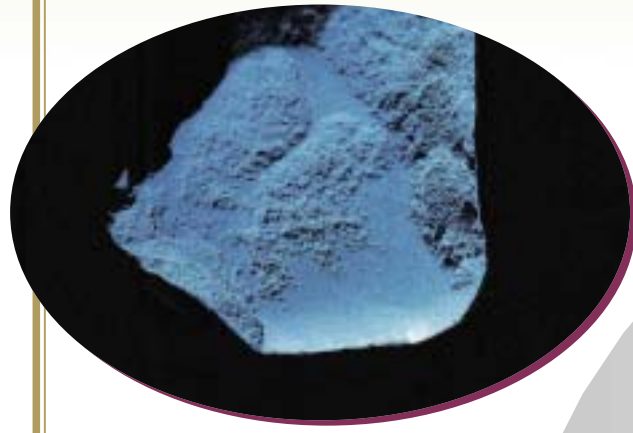


写真1.光にてらしたされる刃部



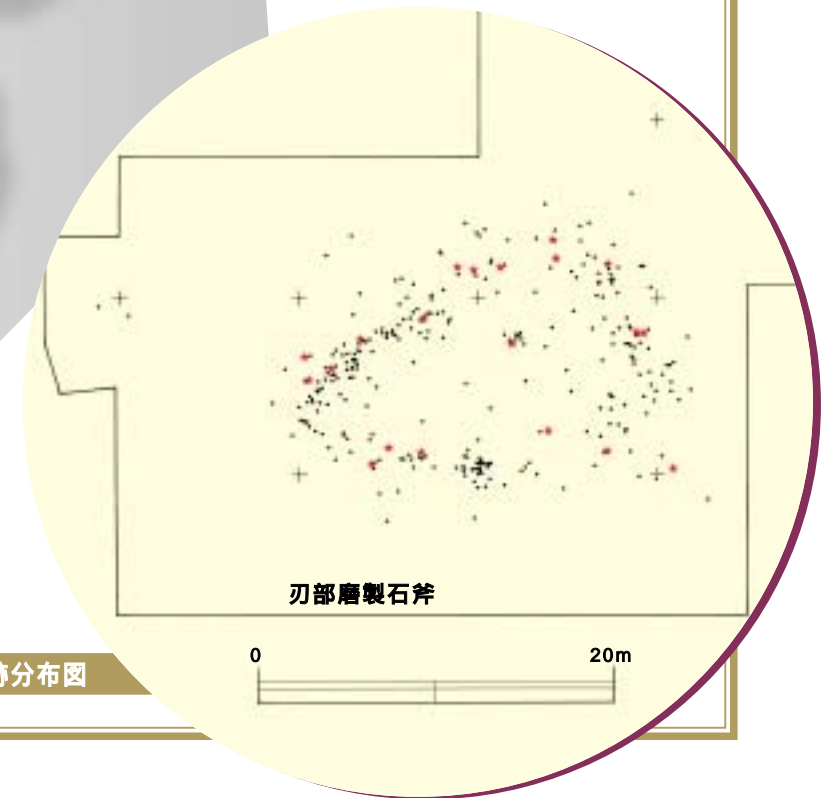
写真2.刃部再生剥片接合資料



遺跡から出土した刃部磨製石斧(21本)



第1図.遺跡位置図



第2図.遺跡分布図

今回は、成田市南三里塚字宮原78-1他に所在する、南三里塚宮原第1遺跡を紹介します。当遺跡は新東京国際空港から1km程南に離れた、標高約40m~41mの比較的平坦で広大な台地上にあります(第1図)。調査地点は2ヶ所あり、両地点から石器のまとまりが環を呈する環状ブロック群が検出されました。2ヶ所のうち、南側の第2地点と呼ぶ地点についてみてゆきます。台地の南側斜面に生活が営まれており、日当たりがよく、目の前に谷津が広

がる環境でした。当時非常に好まれた立地条件だったのでしょう。旧石器時代ではこのような条件のもとで遺跡がよく見つかります。

さて、環状ブロック群ですが、フィールドブックvol.11で紹介した本埜村瀧水寺裏遺跡(龍腹寺裏遺跡から名称変更しました)の『明確な環と中央ブロック』に比べると不明確な楕円形に見えます(第2図)。ですが、この遺跡で最も注目されるべき点は、刃部磨製石斧が20本

確認されていることです(第1地点も含めると21本)。また、刃部再生剥片を接合した結果、さらに3本以上の石斧が遺跡に存在していたことがわかりました(写真2)。これだけの資料が確認されたのは千葉県内では初めてであり、関東地方の遺跡を見回してもそう多くはありません。推測ではありますが、もっと多くの石斧が搬入されていた可能性もあります。

環状ブロック群の中から刃部磨製石斧が発見される例は

非常に多く、また、出現と衰退の時期もよく似ており、運命を共にするかのようによみえます。遺物と遺跡が連動していることは、当時の生活の中で重要な意味があるに違いありません。そのため、両者の関係を慎重に検討し、生活環境の一部を復元してゆくことが課題となるでしょう。しかしながら、千葉県でこれだけの石斧が検出された例がないため、熟考が求められます。整理作業が終わった後も、様々な疑問を投げかけてくれる遺跡となるでしょう。